

桜蔭俳話会 十二月句会 (第三七一回)

平成三十年十二月二十三日 (日)

会場・旭区民文化センター (サンハート)

- 3点②晩年の戦さ場いくつ鯽起し 明美
- 3点①たちまちに星の飛びつく冬木立 才美
- 3点 事も無げな余命の告知冬の雷 かほる
- 3点 年惜しみこの世の介貨車につむ 才美
- 2点①凍星の流れや命尽きるまで 友子
- 2点 幼児性はびこる国や山眠る 守
- 2点 着ぶくれの出女となり箱根関 才美
- 2点 寒空に届け自販機背伸びの子 眞壽
- 2点 アインシュタインの脳の行方や子持鱈 守
- 2点 冬晴や融け込みさうなちぎれ雲 友子
- 2点 歳晩や眼を逸らしたるホームレス 守
- 2点 交差する鉄路のひかり冬ざるる ヤエ子
- 2点 懐手解きて奥の手出す支度 才美
- 2点 終りなき慰霊天皇誕生日 守
- 1点①酒と鍋たらふく食べて山眠る 眞壽
- 1点①痛み止効きて暫しの日向ぼこ かほる
- 1点 相席のひとり同志や冬ぬくし 友子
- 1点 杉玉を映す古井戸冬日濃し 幸
- 1点 前山や寒気の洗ふ肺の奥 守
- 1点 義士の日の監視カメラにある死角 才美
- 1点 大鳥居建て替へ終へて山眠る かほる
- 1点 山門を額に燃え立つ冬紅葉 友子
- 1点 日向ぼこ肥えたる猫の長欠伸 邦子
- 1点 その町は記憶の中に海鼠噛む 守
- 1点 目鋭き黒猫とおる実千両 ヤエ子
- 1点 冬支度に死語となりゆくセル錦紗 邦子
- 1点 冬ざれや亡き友の街通過せり ヤエ子
- 1点 山茶花散る生に期限のあるといふ 守
- 1点 早口の僧の案内や冬ざるる 友子
- 1点 黒髪を巻き込むマフラー歩の速し ヤエ子
- 1点 生甲斐と幸福煮込むおでん鍋 眞壽
- 1点 北風へ駆けて塾の子二、三人 守
- 1点 無人レジ静かに灯る冬の夜 明美
- 1点 数へ日を探し物して終へにけり 友子
- 1点 灯されて一樹聖樹に変はりけり 明美

※

照葉濃し猫追いかける一、二枚

幸

- 兄作りしちりとり出番落葉掃き ヤエ子
- 冬ざるる丘に新たなる墓標 明美
- 何もかも半端人生山眠る かほる
- 生保受けなお金借りる年の暮 眞壽
- 除雪車の雪を光らす常夜灯 明美
- 故郷の友の小包餅の音 かほる
- 山眠る深きところに泉抱き 才美
- 枝打ちし林の向こふ空赤む ヤエ子
- 散歩道木立を抜けし白い息 邦子
- 冬空を鴉飛び交ふビルの街 眞壽
- 行き交ひのひとりとして無し山眠る 友子
- 眼鏡無しの読書の老人冬ぬくし ヤエ子
- 冬枯れの雑草を刈る河川敷 幸
- 遠く見るピオラ奏者や冬の月 守
- 膝折ればしづかな鼓動枯木星 才美
- 誕生日は前の日なりしくリスマス かほる
- 願ひいつ夫婦でつくる注連飾 ヤエ子
- 寒禽の高き一と声散歩道 邦子
- 北風まず北斎の大鼻に 才美
- 血圧計の一喜一憂寒鴉 ヤエ子
- 切り分くるチーズ吸い付く冬厨 幸
- トランクに隠しておきぬクリスマス かほる
- 足伝ふ大地のぬくみ枯葉道 友子
- 修験者の入山霧氷濃かりけり 明美
- 病み上り散歩もできぬ冬の雨 眞壽
- 年用意スックと目覚む膝頭 才美
- 空青く綾取り飛びや冬の鳶 幸
- 忘年会見合ひ重ねし話など 友子
- 落葉掃くことから始む弓道場 才美
- 蜂蜜の葛湯飲むのも病ゆえ 眞壽
- 看護士の笑顔の治療日向ぼこ かほる
- 枯蓮の風と遊ぶや水の影 ヤエ子
- 凧や保護責任者遺棄の罪 守
- 採血のベテランナス小春空 かほる
- 逸れじと店もよく見ず西の市 邦子
- 冬の街カメラ辿りし捜査員 明美
- (欠席投句 古野明美、京林眞壽、稲葉幸)

「事務局からお知らせ」

○第一三二回通信句会作品募集

冬・新年の季語を用いた三句。締切りは二月三日（日）。同封の葉書でお送りください。

○新年食事会と一月句会

（食事会）一月二十日（日）十一時三十分から二俣

川駅ライフ四階の「仕立屋」で行います。

（句会）新年食事会終了後、一時から、ライフ五階の旭区民文化センター（サンハート）で行います。

兼題は、新年に関する一切の季語。

○二月は、句会は休みです。

○三月句会

三月二十四日（日）午後一時から、旭区民文化センターで行います。